

3 『男爵 vs 大妖精 湖上の大決戦』ですか??

『男爵 vs 大妖精 湖上の大決戦』で  
すか???

薄く目を開くと、明るい陽射しが入ってきた。

薄暗い場所の似合う者としては、少しばかり場違いだ。が、ここはどこか。やや身体が揺れているところを見ると、船の上のようだが、潮の匂いもしない。それにたしか俺は、連れと一緒に東洋あたりまで歩いてきていたはずだが

「ボウズ、ここはどこだったかな?」

言っと思って苦笑した。『ルー・ガルー』ではなく『ボウズ』とは、俺もずいぶん人間らしい扱いするようになったもんだ。

ボウズじゃない、オリヴィエだ。その言葉を待ちながら、片手で杖を探していたが、帰ってきたのは別の声だった。

おはよう、サラマンダー男爵

ん?

いや、声。ではないな。頭に聞こえてくる音、というより思念が。

杖を掴んですつと身体を起こすと、目の前は毛で埋まっていた。見上げれば、人より大きな緑の毛玉が、上についている目玉を俺の方に向けている。

「なんの用だ、妖精」

俺は緑の毛玉にひとこと言った。おそらくは強く言えば伝わるのだろうが、そこまでサービスしてやるつもりもない。

そう、これには見覚えがある。あのパリでの闘いで邪魔をしてくれた毛玉だ。

近くにお越しのようだったのだな。また若き友が会いたがっていたこともある。

「ほう。それで、その友とやらはどこにいる? 見当たらないようだが」

別の場所における。

「これはまた勝手なことだ。会いたいと言って呼ん

「おいて他にいらんだと？」

不満かな？

「これを不満じゃない奴がいたら、その場で噛み砕いてやろう。そんな奴には頭などいらん」

なるほど。流石さすがに我が友の頭を喰くわれてはたまらん。ではしばらく、吾輩わがはいがお相手しようか。

「お前が、だと？」

そうだ。サラマンダー男爵。

しかし、さっきからいちいち呼び方がカんに障さまたる。

「妖精ごときにそんな呼び方をされる覚えはないな。

そもそも俺は負けてないし、抑えられたとしても妖精ではないぞ」

男爵とは尊称だと記憶していたのだが　こたわるところは人それぞれだ。では男爵殿とお呼びしよう。

\*\*\*\*\*

「オリヴィエ！来てくれたのね！」

私が温室に入ったとき、聞こえてきたのは喜びにあふれた孫娘——つぼみの声だったわ。

「ん~~~~んっ！」

「うわーっ、ばかばかばか！いきなり抱きつくなっ！」

あらあら、つぼみったら、制服のまま小さな子を抱きしめちゃって。なにを始めたのかしら？

「ま、こーならたらしょーがないわよ。つぼみの場合」

そばにいたお友達——えりかさんも、あきれた顔で見ているわね。

「でも、なーんでいまごろ？世界を見て回るんじゃないかつたの？」

「東洋の国から、砂の中を歩いて来たところまでは覚えてる。それがいきなり霧が濃くなって、気がついたらここにいたんだ」

ああ、そうそう。えりかさんと子供の話でわかったわ。みんなでバリに行ったときに出会ったお友達ね。たしかオリヴィエさんと、もうひとりはそのう。

「まあ。それはきつと、コツペのしわざね」

私はそのまま3人に近づいて声をかけたの。

「おばあちゃん。コツペさま?」

「なんで?」

ふたりの女の子がきよとん、とした顔をしているのを見て、私はちよつと笑ってしまったわ。そう、そういうことなのね、コツペ。

「さつきコツペから連絡があつたの。場所を使わせてほしい、って」

\*\*\*\*\*

ところで男爵殿、ここはどうか?

どうやらこの妖精、俺の呼び名を勝手に決めたらしい。危害を加えるつもりもなさそうだし、そのく

らいは許してもいいが。

ここはどうか、か。

言われて見渡せば、三方は広い水。真水のようにだがわずかに波があるだけの湖<sup>みづうみ</sup>、か。

残りの一方にはやや緑もあり、ずいぶん立派な建物もある。妖精の口調からすれば、自慢の場所なのかもしれんな。

「一見、悪くない場所に見える、が、  
が?」

「だめだ。まるつきりな」

俺は両手を大きく広げて、言葉を放り投げた。

ほう、どこがかな?

「明るすぎる。ゴミひとつ、枯れた花や葉の一枚もない。湖なんて見てみる、動くものひとつないじゃないか。こんなところにいたらダメになるぞ。化け物だろつが、人間だろつがな」

ふむ。気に入ってもらえるかと思つたのだがね。

妖精は淡々と<sup>たんたん</sup>応えてきた。確かにここは、妖精には

いいところなのかもな。それ自体、気に入らないが。

\*\*\*\*\*

「『よいところ』とやらを集めようとした場所なんだろうが、そんなところには居たくないね。『悪いところ』がなくては」

悪いところか。それなら、あそこにある。

妖精がまっすぐ手をかざした先は、先ほど見た立派な——宮殿と言っている建物。その手がぐい、と上下すると、俺の目に、宮殿の中の風景までが遠見眼鏡のように映しだされてきた。中には人間の、女性らしき像が何体も

待て。この姿は覚えがあるぞ。いや、覚えどころじゃない。忘れもしない、あのキュア・アンジェの姿——

ということとは、つまり、ここは

「プリキュア・パレスか!?!」

「ええっ！ サラマンダー男爵をプリキュア・パレスに呼んだのぉ!?!」

「正しく言つと、パレスのそばにある湖に、よ」

私がつこり笑いかけると、つぼみが何やら考えだしたわ。

「ええと、それじゃ 『男爵vs大妖精、湖上の大決戦』、ですか??」

「つぼみ あんた、なんか楽しんでない？ 目がキラキラしてる、つての」

「いえ、べつに、その」

あらあら、ふたりとも緊張感ないわねえ。オリヴィエくんの方が、ぎゅっと両手を握って緊張しているくらい。

「だいたい、なーんで男爵が先なのよ。こーいつのは善いモノが先で悪モノがあとでしょ?」

「男爵は悪者じゃないっ！ うわわわわっ!」

7 『男爵 vs 大妖精 湖上の大決戦』ですか??

「そう、そうよね、オリヴィエー。」

「やめ やめろって、もうー!」

また抱きついて、撫で回してるつぼみを見ていると、苦笑するしかないわね。でもね、つぼみ。あなたの言葉、正解ですよ。

「ふふふ。たしかに、大決戦かもしれないわねえ。コッペにとっては、ね。」

\*\*\*\*\*

いかにも、ここはプリキュア・パレス。来たかったのではないのかね?

「ああ」

俺の目は、真っ直ぐ宮殿を捉えていた。俺たちにとって、こころの大樹と共に叩くべき場所、プリキュア・パレス。

だが、その手前には妖精が、人間にとっては大きな身体を盾に俺を見下ろしている。

「パリで俺が闘いをやめたのは、プリキュアたちのせいだ。おまえ、俺の邪魔をちょっとできただけだ、っていうのを忘れてないか?」

覚えているとも。それでも、だ。

それでも。

妖精は動かず俺を見ている。

「確かにおまえは普通の妖精よりはデカいな。だが、キュアアンジェの妖精はもっとデカく、そして強かった。それでも俺に傷ひとつつづけられなかったんだぞ?」

だろうな。吾輩も、偉大なる大妖精たちのことは知っておるし、一人だけが会ったこともある。吾輩など及びもつかぬ方だった。

「それでも、か?」

無論、それでも。

それでも。

それでも盾になる。それでもひとりで俺をここに呼んだ。か。

「 やめとこい」

「ごろん、とその場に寝転ぶと、緑の毛玉の気配が近づいてくる。俺はそこにひとこと声をかけた。

「妖精、ひとつだけ訊きたい。私が火竜だから水上を選んだのか？」

「そういつた姑息こそくな考えもなくはないが 宮殿パレスが見える場所である以上、火炎をひと息かけるくらい、貴殿には造作もあるまい？」

なるほど。ま、甘く見られてるということでなければいい。

それで、火を吐く準備かね？

「貴様は俺に何をさせたいんだ」

ただの確認だ。一応、吾輩も準備はせねばならんからな

「火を吐かれる準備をか？」

無論。言ってくればやってみるが。

目を開ければ、覗きこむ緑の毛玉。

今すぐ立ち上がって竜に戻り、こいつを焼くのは

簡単だろう。だがこいつは以前、俺のその姿をこく間近で見で、一度は弾き飛ばされた。その上で言っているんだ。『火を吐かれる準備』と。これほど平坦と！

「やらんと言っている。変身は疲れるんだ」

俺はごろん、と寝返り打って、妖精に背を向けた。

「ふむ？ 負けてはいないのではないのか？」

「負けてなくても、勝つてもない。そのくらいの誇りは残ってるさ」

なるほど。『男爵殿』だな。

嫌味か まあいい。

\*\*\*\*\*

「大決戦って、それ大丈夫なの？ あたしたち行かなくて」

えりかさんの声が、さっきよりちょっと心配そうになったわ。そうね、まったく心配してくれないの

も寂しいけれど、

「大丈夫」

安心させてあげよう、と私が口を開きかけたとき、すぐ下から声が響いてきたわ。あら、オリヴィエくん？

「男爵は、認めた相手に変なことほししない。つぼみたちの仲間なら、大丈夫」

ふふ。つぼみに抱きつかれてボサボサな髪だけでなく、まあ、まだ本気で嫌がつてるみたいじゃなさそうね。少し放っておきましょうか。

「一度認めれば、もうからかったりしないから」

「ええ、わかってるわ。コッペも認めてもらいたかったのかもね」

「あのおっさんか カッコさえつけなければ、もう認めてると思うけど」

「なら大丈夫。コッペは恰好かっこうなんて気にしないわ。だけれかさんが望まなければ、ね」

私がちらつ、とつぼみに目をやると、えりかさん

がにやつ、と笑ったわ。

「実のおばあちゃんに言われるんだから、あんたのイケメン好きもたいがいよねえ。つて、さつきから気になってたけど、この匂い ちよっとオリヴィエ。あんた臭くさくない？」

言いながらくるりと半回転。いつもながら、えりかさんの動きには驚かされるわね。

「こういう匂いだと思ってましたけど、言われてみれば、臭い、でしょうか？」

「ふ、ふたりしてクンクンかくな！犬かつつ!？」

そろそろ大人として止めてやるべきかしら、なんて思ったころ、ふたりの女の子が顔を見合わせて言ったのよ。

「これは」

「やるしかありませんね♡」

「え、な、なにを うわわっ!」

「おばあちゃん、温室の大浴場借りますねっ!」  
ふたりして、オリヴィエくんの手を掴んで、その

まま駆け出して行っちゃうんだから。

はいはい、と答えはしたけど、どこまで聞こえていたやら。

「まあ、平和でいいわよね。」「ッペ♡」

\*\*\*\*\*

しばらくの後、俺は船の横で釣り竿を持ち、糸を垂れていた。

遠くにプリキュア・パレスを見ながら、何もいない湖で釣りなど、暇人もいところ　だが、

少しは、落ち着いたかな？

「そうだな。たしかに」

いう間にも、釣り糸はくいくい、と引いている。何もいないはずなのに、まるで俺が飽きないように遊んでいるかのようだ。が、心地悪くもならない。これも、この場所の空気のせいかな。

ならば、吾輩も少しは役に立ったということかな。

妖精の本分は、友たるプリキュアの願いに沿うこと。多分フラワーなら、このような願いはしなかったらうが。

「ボウズを籠絡したプリキュアかな」

わずかに目が上がった。笑っているのか？

つぼみ君の望みは、『自分が関わった者すべての平穩』。もっともいま、かの少年が平穩な状態かどうかは定かで無いがな。

「関わった者すべての平穩、か　それはまた、だいたいそれだ願いだ」

俺の口元が、勝手に笑みを浮かべた。誰にも平穩などとは、神様でも難しい。

うむ。だが無邪気にそう言われては、退くわけにいくまいよ。名ばかりの大妖精でも、な。

俺の横に立って、手から直接釣り糸を垂れている姿は、確かに大妖精にはほど遠い。

地上に降りたくなったら、かかとを三回鳴らせば連れて行ってやるう。



「オズか」

またわずかに、口もとが笑みを含んだ。穴から出て以来、いくつも話を読んだ。ボウズの教育とやらにも相應しい物。物語も、そのひとつだ。

知っているか。さすがに故郷には戻せぬが、出入りくらいならできると

「プリキユアパレスに好き勝手に出入りか？はっ！どれだけの化け物がそれを望んでいることか」

だが男爵殿は、そんな化け物には教えまい。

念を押しているわけではない。確認をしているわけですらない。淡々とした口調を聞いてみると、俺にもそれがわかる。

「まあ、ボウズもいることだしな　ん？とこで、ボウズはどうした？」

あの子か。フラワールの孫娘　つぼみくんたちと、楽しく遊んでおる。楽しく遊ばれている、の方が正確かもしれんが。

「ふう。女の遊びは容赦がないからなあ」

その点には同意する。

ん？

「そうか。お前も苦勞しているか」

コメントは控えさせてもらおうか。

ふふふ。

語ってもわからん相手かと思っていたが、そうでもなさそうだな。

あまりに酷い遊び方ならば、吾輩からも苦言を呈させてもらおう。心配なさるな、男爵殿。

わずかに笑って、妖精が言った。俺はそう感じた。

\*\*\*\*\*

かぼーん

よく音の響く場所——日本の風呂というところで、僕はお湯に浸かってた。

ふたりして無理やり連れてきて、いきなり着てるもの脱がせられて、いつの間にか、自分たちだけ水

着に着替えちゃってさ。別に、ヘンな期待なんてしてないけど。

けど、ね。

『さあ、流しますよっ！』

『まっつてよこらー！ つぼみは恥ずかしくないの！？』

『なんで恥ずかしいんですか？』

『いや だって はだか』

『なーに色気ついちゃってるの。赤ちゃんのオムツ』

とつかえんのと同じよ、同じ』

『僕は、赤んぼうじゃなーいっ！！』

ああ、思い出したら落ち込んだよ。犬とどっちがいい扱いなのかわからないや、もう

「それで、オリヴィエ。どう？世界は？」

「無理やりお湯につけていて、なに、その質問？」

「いやじゃないの。はあ、温室にこーんなお風呂がついてたなんてねえ。気持ちいいわあ。あんたも、そう思わない？」

えりかがあくびしながら言うのを聞いてると、僕もなんだか気持ちよくなってきた。けどさ。

「そつです。世界をまたぐるーつと回って、疲れたらこのお風呂に入りに来てください。ね、オリヴィエ」

「お風呂だけ？のんびりさせてあげればいいじゃん。

1日2日くらいさ」

「えりかが泊めてくれるんですか？」

つぼみとえりかが、顔を見合わせてそう言うのを、僕は遠くの世界のことみたいに見てた。実際、遠くの世界なんだ。僕たちは、この世界——普通の人たちの中で居続けるのが、難しいから

「んー ああ！」

そんなこと、ぼーっと考えてたら、ぼんっ、とえりかが耳元で手を打った。なんだよもう、いつたい。

「それだよつぼみ！だから、コッペ様」

\*\*\*\*\*

のんびりと釣れない釣りをしていると、陽がゆっくり傾いてきた。

さつき聞いた説明では、好きな時間で止められるのだそうだが、俺が断つたんだ。そこまでされては、本当にダメになりかねんからな。

して、男爵殿。ここを発つてどちらへ行かれるかな？

俺が釣り竿に糸を巻き取るのを見て、妖精が言った。

「世界だな。色々目にして、色々音に聞いて、退屈する暇などない旅に戻るさ」

退屈なはずの釣りも、なかなか楽しかったが

そこまでは言つてやらないことにした。だが妖精は宙を見上げて言つたんだ。

世界か 若き友は、また宇宙に行きたがつておる。だが吾輩には連れて行けぬ。

苦笑する姿が、やや寂しく見える。そうか、デュー

ンとの闘いには参加できなかったのだつたな。

「俺も同じだ、というのか？ふむ」

言われてふと考えた。違うというのは簡単なんだが、似てはいるかもな。

「世界を見せるのにも限度はある。見せられるのは所詮、『俺と一緒に見る世界』までだ」

左様。吾輩たちが行けぬ世界は見せられぬ

行けぬ世界へと行くのなら、残されたものが、また先へ進む者が、疲れたときどこかに戻るべき場所が要るのではないか そう思つてな。

いつの間にか、妖精の目は真っ直ぐ俺を見つめていた。戻るべき場所、だと？

「ここを、そのために、つていうのか？」

叶うならば。

無音かと思つたが、耳をすませば聞こえるものだ。

水音と空気の音、風が宮殿の——像の間を流れる音。

「ふう」

あのプリキュアの像が並ぶこの場所を、化け物の

休み場所にか。

\*\*\*\*\*

「お節せち介もいいところだが　妖精　まだ名前を訊いていなかったな」

吾輩の名はコツペ。プリキュアの伴ともにしてプリキュアの友だ。

「コツペ、か　覚えておこつ。ではそろそろ、かかとを鳴らしたところだが。いいかね？」

構わん。しかし、また来れるかね？

「いずれまた、東洋に俺たちの気配がしたら、引つ張ってくるがいいさ。ああ、そのときには『殿』はいらん。』男爵』だけでいい」

妖精——コツペが目を上げに振った。笑っているのだろう、と俺は解釈した。

間違っていて、別に構わないがな。

ばいばーい、と温室の前で手を振るプリキュア達に見送られながら、俺たちはまた歩き始めた。

ボウズは真つ直ぐ手を上げて振り返っている。俺も、まあ右手を少しくらい振つてやらんでもない。

やがて、女達の視線も感じなくなった頃、俺はボウズに声をかけた。

「ずいぶんこぎれいになったじゃないか、ボウズ」

「ボウズじゃない。オリヴィエだ」

「なんだ、気に入ったのか、その名前？」

「そんなんじゃない。ただ　この土地こゝじゃそつ名乗りたいだけだ」

いつもとは匂いも態度も柔らかくなったボウズだが

「モテないぞ、ボウズ」

「何百年もモテてない男爵に言われたくないよ」

うん、あいかわらず素直にはなれないか。変わら

ないのは、いいことでもある、な。

「 どうだ、またここに寄りってみるか? 」

俺は空を見上げて、軽く口に出した。そう言えば、あのプリキュアのひとりには、この空のさらに上を指してるんだっとな、などと思いがら。

「 たまにでいいよ 」

すぐにかえってきた答えに、思わず頭を戻して覗きこんだが、

「 ほっ ? 」

「ほんとに！ たまにでいいんだよー! 」

赤くなつた顔に免じて、もういちど口に出すのがまんしてやるう。

『 それじゃモテないぞ 』 とはな。

— おしまい —